

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730650

研究課題名(和文)小学生から高校生までの学校における怒りの多次元的特徴の検証とその予防的介入

研究課題名(英文)Multidimensional Characteristics of Anger in Childhood and Adolescence

研究代表者

下田 芳幸(Shimoda, Yoshiyuki)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：30510367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：小学生から高校生までの子どもたちが学校で感じる「怒り」を、感情面、認知面、行動面から測定する日本語版尺度を作成した。また、感情評価、ストレス、自動思考、社会的スキルとの関連を検討し、男女や学校段階で異なる関連性を見出した。したがって、子どもの学校での怒りは、多面的視点から理解する必要がある。

また、小中学生で怒りのコントロールに関する心理教育を実践し、怒りの不適切な表出の緩和の効果を見出した。学校内での限られた時間でも、怒りの適切なコントロールに関する心理学的な教育支援が可能であることを示唆する結果であった。

研究成果の概要(英文)：This study developed the Japanese version of the Multidimensional School Anger Inventory (MSAI). The MSAI was devised to assess anger in the school context from a multidimensional perspective, which includes Anger Experience (affective component), Cynical Attitude (cognitive component), Destructive Expression and Positive Coping (behavioral component). Exploratory and confirmatory factor analysis identified that the four-factor structure of the J-MSAI was the same as for the original MSAI. The reliability of the scale was supported by internal consistency and test-retest stability for the subscales. The construct validity of the scale was supported by cross-instrument correlations. Furthermore, the results showed that junior high and high school students had higher scores for Cynical Attitude than elementary school students, whereas developmental level had little effect on Anger Experience and Destructive Expression.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：怒り 攻撃性 学校 小学生 中学生 高校生

## 1. 研究開始当初の背景

平成 22 年度の学校での暴力行為の件数は、小学校で 7092 件、中学校は 42987 件でいずれも前年度より微減、高校は 10226 件で前年度より微増となっており、いずれも極めて多い発生件数である（文部科学省、2012）。また、子どもたちのいわゆる“キレる”現象への対応も学校現場の課題であり、怒りや暴力のメカニズムの解明や予防的・介入的知見の提供が、心理学に強く求められている。

我が国における児童期・思春期の怒り・攻撃性については、一般的な怒り・攻撃性の特性に焦点を当てた研究はいくつか見られる。しかし、文部科学省の調査にあるような暴力行動の背景にあると予想される、学校という場面状況を反映した、「学校における怒り」に関する研究は、日本では極めて数が少ない。また、一般的な怒り・攻撃性を測定する既存の尺度についても、怒りの複数の側面を含むものの、感情・認知・行動の 3 側面から捉える怒りの三次元モデルが尺度構成に直接的に反映されていない。そのため、対象となる児童生徒の、怒りの感情・認知・行動の各側面に関するアセスメントやそれに基づく手法の選択、介入の効果やメカニズムの検証のための情報を効率的、あるいは十分に得にくいといった問題点が指摘されていた。加えて、既存の尺度は小学生用、中学生用、高校生用と学校段階別に異なる項目で構成されており、発達段階の検証を直接的に行うことができない、という限界も指摘されていた。

そこで本研究では、学校での怒りの多次元の尺度（Multidimensional School Anger Inventory, 以下 MSAI）に注目した。MSAI は Furlong et al（2002）が作成した学校での怒りを感情・認知・行動の三つの側面から多次元的に捉える尺度であり、10 - 17 歳を対象としている。本尺度の日本語版の作成により、先に挙げた先行研究の課題、すなわち、わが国の学校という場面状況を反映した怒りのメカニズムが多次元的に解明され、さらに発達的变化も明らかとなる。また、その知見を踏まえた心理教育的介入の効果検証を行うことで、学校での暴力行為の解決に資する知見が得られると期待される。

さらに、MSAI はすでにアメリカ等 6 カ国で使用されており（Jimerson et al, 2012）、その日本語版を作成することは、将来的に子どもたちの怒りの国際比較研究への発展も期待される、という状況であった。

## 2. 研究の目的

(1) MSAI の日本語版を作成し、小学生から高校生までで実施して、因子の再現性、妥当性及び信頼性を検証する。

(2) 日本語版 MSAI で測定される怒りの 3 次元の次元間の相互影響性、およびストレスナー、自動思考、感情評価、社会的スキルと日

本語版 MSAI で測定される学校での怒りの関連性を検討する。

(3) 学校での怒りを適切にコントロールするための心理教育を考案・実践し、その効果を J-MSAI の得点の変化から検証する。

## 3. 研究の方法

(1) 対象：高校生 1214 名、中学生 1426 名、小学生 803 名 使用尺度：日本語版 MSAI（原著者の許可を得て日本語に翻訳し、それを逆翻訳して原著者へ確認してもらい、日本語訳が原板と同一の意味を保っていることを確認したもの）、一般的な攻撃性を測定する尺度（日本語版 BAQ, HAQS, HAQC）、攻撃行動を測定する尺度（ABSA, ABSC）、学校生活享受感情尺度、および教師評定（当該概念の記述に該当する／しない生徒をそれぞれ 3 名程度挙げるといったノミネーション法） 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(2)-1 対象：小学生 198 名、中学生 345 名 使用尺度：日本語版 MSAI 短縮版 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(2)-2 対象：小学生 186 名、中学生 294 名 使用尺度：日本語版 MSAI 短縮版、教師・学業・友人・親・自己に関するストレスナー尺度 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(2)-3 対象：小学生 205 名、中学生 348 名 使用尺度：日本語版 MSAI 短縮版 児童用自動思考尺度 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(2)-4 対象：中学生 335 名、高校生 250 名 使用尺度：日本語版 MSAI、感情評価尺度 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(2)-5 対象：小学生 170 名、中学生 319 名 使用尺度：日本語版 MSAI 短縮版 子ども用社会的スキル尺度 手続き：調査協力が得られた学校において、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(3)-1 対象：実践群 65 名（男子 30 名、女子 35 名）、対照群 61 名（男子 27 名、女子 34 名） 使用尺度：日本語版 MSAI のうち、怒り体験を除く 3 下位尺度 手続き：協力が得られた学校において、クラス単位で 2 回のストレスマネジメント教育（ストレスの理解とリラクゼーション技法の練習、コーピングに関する理解）を実施した。対照群は通常の授

業を行い、期間の前後に2回、尺度を実施した。尺度は、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

(3)-2 対象：小学生33名 使用尺度：日本語版MSAIのうち、怒り体験を除く3下位尺度 手続き：協力が得られた学校において、クラス単位で2回のストレスマネジメント教育（ストレスの理解とリラクゼーション技法の練習）を実施した。調査協力校の都合で対照群は設定できなかった。期間の前後に2回、尺度を実施した。尺度は、クラス単位で一斉に実施しその場で回収した。

#### 4. 研究成果

(1) 探索的および確認的因子分析の結果、日本語版MSAIは、原尺度と同じ4因子構造（怒り体験、皮肉的態度（研究業績において、査読者の指摘を踏まえて、学校への敵意または敵意と表記したものもある）、破壊的表出、積極的対処）であることが確認された。

また、内的一貫性および再検査信頼性による尺度の信頼性、基準関連的尺度との関連による尺度の妥当性が確認された。

さらに、皮肉的態度は中学・高校生は小学生より高いものの、怒り体験や破壊的表出は、発達段階でさほど大きな違いのない可能性が示唆された。

なお、同じデータを用いて、日本語版MSAIの短縮版を作成し、信頼性・妥当性を検証した結果、日本語版MSAI短縮版は、信頼性・妥当性を有したまま短縮されたことが確認された。

(2)-1 小学生男子では、積極的対処が“怒り体験”に抑制的な影響を、小学生女子では、怒り体験に対して破壊的表出が促進的な影響を及ぼし、怒り体験と敵意から積極的対処への抑制的な影響も確認された。中学生男子については、積極的対処が破壊的表出を高め、また破壊的表出は怒り体験と敵意を高めること、中学生女子では敵意が怒り体験を高め、敵意と積極的対処が相互に抑制的な影響を及ぼすことが明らかになった。

このように、それぞれの関連性において学校段階や男女で異なった結果が得られたことから、これらの差異を加味した知見を蓄積する必要性が示された。

(2)-2 教師ストレスが学校における敵意・破壊的表出を強めること、また、その他のストレスから怒りの行動表出への影響が、敵意の程度によって異なる場合があることが示された。中学生においては、学業ストレスの破壊的表出への有意な影響が認められた。性別と学年によっては、学校に関連しないストレス（親ストレス・自己ストレス）が、学校の文脈における認知的・行動的怒りに影響することも示され

た。

これらのことから、学校での怒りにまつわる問題やその予防にあたっては、教師と生徒の関係構築、学校でのストレスの低減と同時に、家庭や地域を含む包括的な対応が必要であると考えられた。

(2)-3 怒り体験には、中学生男子のみ、ポジティブ自動思考から正の影響が示された。認知的側面である学校での敵意では、小中学生の男子でネガティブ自動思考からの影響があり、女子は小中学生ともに、自動思考のいずれとも双方向の影響性が示された。行動的側面のうち破壊的表出については関連が示されず、積極的対処に関しては、小学生男子と中学生女子でポジティブ自動思考からの正の影響が観測された。

これらの関連性を踏まえて、発達段階を考慮する必要性や、ポジティブな自動思考に注目した心理教育実践への本知見の適用について考察した。

(2)-4 感情評定尺度の得点を用いて対象者を4群（平均群・不安否定高群・両高群・両低群）に分類し分析を行ったところ、皮肉的態度は中学生の不安否定高群と両低群が平均群より高く、また平均群では中学生より高校生が、両低群では高校生より中学生が高かった。破壊的表出も中学生の不安否定高群と両低群が平均群より高く、また両低群では高校生より中学生が高かった。積極的対処は男子で両高群が平均群および両低群より、不安否定高群が両低群より高く、また両低群では男子より女子が高かった。

中学生では、陰性感情の否定的評価が低いと、態度や行動面で直接表出されやすい。だが同様の傾向は、不安感情を否定的に捉えている場合にも見られており、反動的に怒りの認知や行動が表出されている可能性が考えられる。一方、怒り感情も同時に否定的に捉えている場合には、こういった傾向は抑制される。よって、否定的評価の相互作用に留意する必要がある、また不安感情の捉え方が、中学生の学校での怒りを理解するうえで重要であるといえる。

ただしこれらの傾向は、高校生では示されなかったことから、陰性感情の否定的評価と心身の発達との関連について、さらなる検討が必要である。

(2)-5 小学生男子については、学校への敵意と破壊的表出がスキルを抑制、積極的対処が仲間強化やアサーションを促進し、スキルは怒り体験、学校への敵意、破壊的表出を抑制、仲間強化とアサーションは積極的対処も促進すること、小学生女子については、学校への敵意が仲間強化と規律性を抑制、怒り体験と破壊的表出は規律性を抑制、積極的対処は仲間強化を促進し、仲間強化とアサーションが積極的対処を促進、規律性が破壊的表出

を抑制すること、中学生男子については、学校への敵意がスキルを抑制、積極的対処はスキルを促進、破壊的表出は仲間強化と規律性を抑制し、スキルは学校への敵意を抑制、積極的対処を促進、規律性は破壊的表出を抑制すること、中学生女子については、学校への敵意がスキルを抑制、破壊的表出は仲間強化と規律性を抑制し、積極的対処は仲間強化とアサーションを促進し、スキルが学校への敵意と破壊的表出を抑制、積極的対処を促進、規律性は怒り体験も抑制することを明らかにした。

これらの結果を踏まえて、学校における集団社会的スキル教育が学校での怒りの肯定的変化にもつながるといった波及的有用性について論じた。

(3)-1 尺度得点について、実施後から実施前のものを減じて差得点とした。各下位尺度の差得点を従属変数とし、実施の有無および性別を要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、破壊的表出において、実施群の得点は対照群のものと比較して、有意に低かった ( $F(1,122)=4.96, p<.05$ )。このことから、今回実施したストレスマネジメント教育は、中学生における怒りの直接的な表出を下げる効果がある可能性が示された。一方、皮肉的態度と積極的対処については、ストレスマネジメント教育の成果を示す結果は得られなかった。

皮肉的態度は学校への敵意的態度であるため、教師との良好な人間関係や肯定的な学級風土の形成を図ることで改善されるのかもしれない。また積極的対処は怒りを社会的に受け入れやすい形で表出するものであるため、ストレスコーピングの理解よりもアサーショントレーニングや社会的スキルを実施する方が有効である可能性が考えられる。

(3)-2 尺度得点について、実施後から実施前のものを減じて差得点とした。各下位尺度の差得点を従属変数とし、実施前の尺度得点の高低および性別を要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、破壊的表出において交互作用が有意であり、女子の高群は男子の高群および女子の低群と比較して、有意に得点が低かった ( $F(1,28)=5.90, p<.05$ )。このことから、今回実施したストレスマネジメント教育は、小学生女子のうち破壊的表出が高かった生徒に対して、表出を低下させる効果があったと考えられる。一方、皮肉的態度と積極的対処については、(3)-1 と同様に、ストレスマネジメント教育の成果を示す結果は得られなかった。

したがって、小学生に関しても前述のとおり、皮肉的態度を変容させるためには、教師との良好な人間関係や肯定的な学級風土の形成を図ることが必要である可能性が考えられる。また、積極的対処は怒りを社会的に受け入れやすい形で表出するものであるた

め、ストレスコーピングの理解よりもアサーショントレーニングや社会的スキルを実施することが有効であるのかもしれない。

以上をまとめると、学校での怒りについては、学校段階および性別に多様な促進/抑制要因が存在することが示されたことから、不適切なレベルの怒りを低減させるためには、学校段階や性別に即した関連要因を念頭に働きかける必要があるといえる。

また、リラクゼーション技法を中心としたストレスマネジメント教育は、破壊的表出の抑制に効果がある可能性があるものの、皮肉的態度の緩和や積極的対処を促進するためには、教師と生徒との良好な関係の構築や認知的ワークの実施、社会的スキル教育や適切なコーピングの実施を促すような心理教育なども取り入れ、包括的に行っていく必要があると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

下田芳幸・寺坂明子 (2012). 学校での怒りの多次元尺度日本語版の信頼性・妥当性の検証 心理学研究, 83, 347-356. 査読有

下田芳幸・寺坂明子 (2012). 学校での怒りの多次元尺度日本語版の短縮化 富山大学人間発達科学部紀要, 7(1), 129-138. 査読無

下田芳幸・寺坂明子 (2013). 小中学生における学校での怒りの次元間の相互影響性の検討 富山大学人間発達科学部紀要, 8(1), 23-34. 査読無

下田芳幸・寺坂明子 (2014). 小中学生における学校での怒りとストレスとの関連の検討 富山大学人間発達科学部紀要, 8(2), 1-9. 査読無

[学会発表](計6件)

寺坂明子・下田芳幸 (2010). 日本版 Multidimensional School Anger Inventory 作成の試み(1) 下位尺度構造の確認 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集, 355. 東北大学

下田芳幸・寺坂明子 (2010). 日本版 Multidimensional School Anger Inventory 作成の試み(2) 男女差および基準関連妥当性の検証 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集, 356. 東北大学

下田芳幸・寺坂明子 (2011). 学校ストレスが小中学生の学校での怒りに及ぼす影響 日本心理臨床学会第30回大会発表論文集, 399. 福岡国際会議場他

下田芳幸・寺坂明子 (2012). 陰性感情の否定的評価と学校での怒りとの関連 日

本心理臨床学会第 31 回大会発表論文集，  
426．愛知学院大学  
下田芳幸・寺坂明子（2013）. 小学生の学  
校での怒りと自動思考との関連 日本心  
理臨床学会第 32 回大会発表論文集，455．  
パシフィコ横浜  
寺坂明子・下田芳幸（2014）. 学生におけ  
る学校での怒りと社会的スキルの因果関  
係 日本教育心理学会第 56 回総会（発表  
予定）. 神戸国際会議場

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

下田 芳幸（SHIMODA, Yoshiyuki）  
富山大学・人間発達科学部・准教授  
研究者番号：30510367